

第3回 滋賀県社会教育委員会議における会議概要

期日：平成21年（2009年）7月31日（金）

場所：コラボしが21 中会議室

1 開 会

○県教育委員会生涯学習課長挨拶

2 議 事

(1) 社会教育委員会議の今期の審議内容について

審議テーマ

「住民同士が学びあい、住民相互が支えあう地域のきずなづくり」

<5つの視点>

- 1 人生のどの場面においても豊かな人間関係を形成
- 2 学校を拠点とした地域連携と新たな学校運営の創造
- 3 まちづくり型社会教育施設の育成
- 4 「産公民学際連携型」まちづくりの推進
- 5 コーディネートシステム、コーディネーターの配置と養成システムの構築

(2) その他

3 閉 会

出席委員（五十音順）

石橋委員、今居副代表、宇野委員、織田代表、亀井委員、神部委員、千歳委員、高木委員、谷口委員、津屋委員、中野委員、廣瀬委員、藤森委員、松本委員、山口委員

県教育委員会生涯学習課長挨拶

皆様、こんにちは。委員の皆様方には、公私とも何かとご多用のところを、本日の会議にご出席いただきまして、ありがとうございます。

また、平素、皆様方には本県の生涯学習の振興、社会教育の推進につきまして、格別のご支援とご指導を賜り、あらためて深く感謝を申し上げます。

さて、地域全体で子どもを支える教育力が低下していると言われていますが、それに対応するため、生涯学習課におきましては、家庭、学校、地域、企業が一体となって子どもの育ちを支える環境づくりに取り組んでおります。

子どもたちは夏休みに入りましたが、地域の大人も参加する「ふれあいラジオ体操」の推進など大人と子どもとが一緒に活動することによりまして、地域のきずなの再構築に寄与できるよう



な取組を進めようと努めているところでございます。

前回、3月に開催しました、第2回の全体会では、「住民同士が学び合い、住民相互が支え合う地域のきずなづくり」を今期のテーマとして取り上げ、5つの視点について協議していくことが確認されたところでございます。

全体会以降、5月21日、6月25日の2回の専門委員会を開催させていただきまして、専門委員の皆様にご協議いただきました。

本日は、審議テーマに対し、委員それぞれのお立場から、貴重なご意見、ご提案をいただくこととなりますが、忌憚のない意見交換を図っていただきますようお願い申し上げます。

限られた時間の中ではございますけれども、実りある全体会にしていただきますことをお願いしまして、開催にあたりましてのご挨拶とさせていただきます。どうか皆さま、よろしくお願い申し上げます。

議事の概要

【代表】 それでは、議事に入ります。今まで専門委員会で検討してきました。今日は一連の作業の中では、一番密度の濃い会議にしたいと思っておりますので、2つの小グループでざっくりばらんに話し合おうという形で進めていきます。

この後、2つのグループに分かれていただき、前半は40分間で視点の2番目、3番目の比較的現場に沿ったテーマでわかりやすい話を先にしていただき、後半を視点の4、5についてお願いします。視点1は全体の話なので後から話してもよろしいかと思っております。最後は、11時40分にはまた、皆さん集まっていたいただいて各グループの様子を聞かせていただき、まとめをして終わりたいと思っております。

この後全体のスケジュールを見ていただくとわかるのですが、今日は議論をして、下地を作って夏から秋にかけて提言を作成する予定です。

皆さんには、提案シートを出していただきました。私も作りましたが、皆さんも工夫を凝らして書いていただいております。グループで話す魅力もありまして、インスピレーションというのを大いに出していただいておりますので、記録は事務局をお願いしておりますので、後でひもといいて次のステップに移りたいと考えています。

【事務局】 資料にありますように、Aグループ、Bグループに分かれていただきます。協議については、代表にお話ししていただいた進め方でご協議をお願いします。

(※2つのグループに分かれて、それぞれご協議いただきました。以下、各グループの概要です。)



<Aグループの概要>

【代表】まず、学校、社会教育施設におけるまちづくり、きずなづくりについてお話していただきたいと思います。視点2、3について提案シートをもとに話題提供をお願いします。

【委員】全体のイメージ、学校を核とする地域ということで今までの論議を聞き、岩根小学校の形を進める案が出てそれも一つの手だと思えますが、どのように具体的に示してまとめているかという時に、他の事例を探してみました。親が育ち、子が育つという地域を作ろうという合い言葉は共通ですが、そのためにやっぱり親が積極的に学ぶ必要があります。親が地域を育てると言いながら、学校を育てるという動きがあるんだけど、一般的にどう普及するのかが鍵です。そのためには、子どもたちが、支えあうボランティアを見て感動を起こすような、出会いができれば一番早いと思います。そのような人との出会いが、学校での子どもへの教育には生きた事例としていいと思います。

その具体的な事例を探してみると、小学校からその意識を育てるという考え方で、神奈川県をはじめ多くの所で試みています。市民の精神を小さい時から育てるため「シチズンシップ教育」に取り組んでいます。小学校、中学校、高等学校の時から私たちは市民であるということを教えようと、そのための能力、意識、スキルをボランティアや先輩たち、学校以外の人たちの協力を得ながら、育て上げるシステムを作っていこうというものです。

子どもたちが将来市民として十分な役割を果たし得るよう知識、態度、スキルを体得させるための教育であります。

ただ、これをやっていくと、エリート教育というのかすべての子どもがそうなるかわかるのですが、一方、今100万人を超すと言われます社会的なひきこもりや自立できない子どもたちがいるのも現実です。そういう子どもが出てきたときに、シチズンシップ教育を導入して、引きこもりがある現状を、一方それが本当の支えあいではないかという形で、二つのことを考えた時、学校を支えるシステムとしての地域連携と新たな学校運営のどちらに軸足を置くかによって考えていけば、少し方向性が見えるのではないかと思います。

【代表】シチズンシップ教育とは、具体的に何をどのようにしているんですか。

【委員】小学校、中学校、高等学校で市民教育を時間を限ってやっていこうとするものです。5年生では、10時間かけて自動車工場へ行って、見学した後、自分たちはどう思うか、新しい自動車の開発やエコ、電気自動車の開発、歩行者のことなどあらゆる角度から考えさせていきます。1つの工場見学をさせて終わるのではなく、連続的に行ってレポートを書かせたり、自分の意見を出しながら、まとめて、その意見を市長に直接メールを送ったり、電池会社の社長さんにフィードバックしながら育てていこうとという具体的なカリキュラムを組んで行うものです。

【代表】何年前からやっているのでしょうか。

【委員】平成21年3月から正式に取り組んでいます。取組はずっと前からしているようで、神奈川県以外でもやろうという動きがあり、まだ実験段階でこれからやっていこうとしている段階です。

【委員】内容としては、総合的な学習の時間の実践とほぼ重なると思います。

【委員】キャリア教育から出発しているようで、キャリアという概念は就労だけでなくいわゆる市民性として必要なものを、モデル的に集団自治を子どもの時から育てるものです。

【委員】アプローチが違うけれども中身的には同じ話です。生きる力を育てる中で、自分で自ら問題にぶつかった時に、主体的に生きる市民を育てるということです。

【代表】学校教育の中で位置付いているものですね。社会教育側から学校教育に切り込んでいくという視点から学校教育を見ていけないでしょうか。



【事務局】滋賀県では、キャリア教育としてチャレンジウィークとして職業体験を実施しています。

【委員】職業体験や総合的な学習の時間など地域の人も一緒になって子どもを接点にして結びついていきましょう、ということなのかと思います。

【委員】シチズンシップ教育という言葉に引っかけたのは、前の全体会でありましたように親がボランティアに参加して、親と子どもが育たなくちゃ人間が育たない、という所があるんですよね。日本人はどうも無関心と

いうか、自分の子どもがいる時はいいけれど、卒業したら関係ないとか、マンションでは地域は関係ないなど、参加する意識があまりないように思います。どうやって意識を持たせるかという時に、外国では小さいときから宗教があります。日本では、全体的に意識を統一させる何かが市民意識を育てようということだと思います。そのためには、滋賀県全体の意識をこう変えるのだから岩根小学校のコーディネーターやシステム作りは、いいんだということに結びつけることができればいいかなと思います。

【代表】資料にありますように「学校を拠点とした地域連携と新たな学校運営の創造」をあげ、その中で「伝統性、歴史性、文化性、シンボル性や人口やエリアとしてのまとまりやすさ、「顔」が見える社会、くきずな>の結びやすさ等から、小学校を核とする小学校区を地域連携の単位として捉え、くきずなづくり>を進めていく」と一つの方向性を示しています。その後、具体的な施策提案を書き込んでいきたいなあと考えています。提言の目次案の一つです。私は、岩根小学校でやっておられるのは国の応援があつたらしいのですが、もう少し滋賀県全体に広げられないのかと思います。そこで何が問題で何をクリアしたらいいのか、はっきりさせたいと思います。

【委員】文部科学省の会議で実践を提案しました。そこには、全国から400人が参加していました。3校が発表しなせ、コミュニティスクールが広がらないのか、議論をしました。

会議が終わってから十数名の方が集まって来られ、話をしました。他の2校のうち、1校は、京都市のように教育委員会がお金と人をつけていくケースでそれが大半です。私が提案したのは、コミュニティスクール型と言っています。日本は、学校運営協議会を重視しています。地域が権限を持つ、権限論というところが出てきやすいので、それは違うと思います。イギリスのイングランドでは、拡張学校と言ひ、スコットランドでは統合スクールと言っている取組があります。アメリカ合衆国ではフリースクールがあり、組織の形態だけを日本は取り入れ、論議の的になっています。

予算を見ると、イングランドは6年間で1,720億円使い、日本は1年間で1億円ぐらいです。

金額では比較になりません。大人をどう支援するのかを考えているので私もそのようなことを取り入れました。校長室をオープンにして誰にでも来てくださいというようにしました。そうでないとPTAで研修をしてもその気のある人は来てくれるけれど、聞いてほしい人は来ないという現実があります。そのことが学校の二極化を生み出しています。そこが大事であるのでコミュニティの中に相談機能が必要です。同和教育の視点で草の根的に相互扶助の関係と協働の精神をどう生み出すのが大切です。

先ほどの委員の話のように、私がイメージしてきたのは、小学校1,2年生の時期における、いい意味でのおせっかい焼きです。何か持ってあげよう、してやろうという気持ちがありますが、いつの間にかそれが無くなります。こんなことを言っただけは失礼ですが、今、学校のために活動している人は、子どもの時におせっかいを焼くのが好きな人が多いようです。低学年のいい意味でのおせっかい焼きを育てようと思っています。

おせっかいをノーとしてきましたが、人間は基本的には何かやりたいと思っています。

また、ソーシャルインクルージョン（社会的包摂）を育てたいという人がいらっしゃいます。しんどい層をどう支えるのかというプロセスを考えています。

そことマッチしないと二極化して、「早寝・早起き・朝ごはん」もできる人だけが参加している現実があります。

イギリスでは、貧困層に力を入れています。貧困層は人と一緒につながって仕事をするのが苦手だと言われています。その親たちが何人か学校で出会って、子どものためにクリスマス会を企画していくことから始めて、人と一緒になってすることの喜びを感じるようにしています。

私の所でも子育てに悩んでいる親をボランティアの中に入れるようにしています。そのようなコミュニティづくりが必要と考えています。他の学校でできない理由は、日本では入口が見えない、どうしたらいいかわからないということだと思います。

また、視点5に関係しますが、それを運営するコーディネーターを位置づけられるかどうかで全然違ってきます。県内では、コミュニティスクールは岩根小学校だけです。

【代表】県単独でできませんか。

【委員】コミュニティスクールの予算は、1校50万円です。地域コーディネーターは、学校支援地域本部事業の予算で設置しています。

【事務局】学校支援地域本部事業は、平成20年度から3カ年の文部科学省委託事業として始まり、事業費の多くが地域コーディネーターの配置に充てられています。

【委員】学校支援地域本部事業を発展させてコミュニティスクールにしたいと思っている町もあります。

【委員】内発的な動機付けがあって取り組んでおられますが、システムで事業が降りてきて取り組むのは、私たちの助成金も一緒ですけど、枠があって書類書きで大変みたいです。内発的動機付けや思いというのは、コーディネーターのトップになっているいろんな所にまわっていただいて、思いを語ってもらうのが一番みんなに伝わるような気がします。

NPOは、思いがあってもお金がありません。反対にお金があっても思いが無い企業などもあ

ります。県内にすばらしい人がおられるのでどう広げていくかを考えています。

お寺の仕事で昔、寺子屋みたいなのがありました。そういう活動を今もずっとされていることをこの会議に参加して知りました。もっと広げていく路線で、現在やっているところを進めることが大事です。予算がついたら結局事務仕事が増えてしまうことがあり、何が主になるのかわからなくなることがあります。動機付けや思いが大事です。

【委員】昔からの日曜学校を週1回やっていますが、年間何回か大きな事業もしています。その事業を通して生きる力を育てていこうと思っています。子どもを主にしてカレーを作らせるようにして、親はそれを見守るようにしています。子ども会は親がするものと思ってる人もいるので、それは違うよ、子どもがするものですよとPTAの総会などで話をしています。

【委員】委員の中でも関わっていらっしゃったと思うのですが、駄菓子屋大作戦というのがあります。大津市でも、知り合いが駄菓子屋楽校をしています。駄菓子にこだわるのはどうかと思いますが、子どもにとって安く買えるし、食べるだけでなくそこでコミュニティができて、買う役や売る役になってそこで育っています。

寺子屋では昔、あかんことはあかんと言い、きれいに靴をそろえてね、気持ちいいやろと今の親ができないことを教えていました。そういった寺子屋風というようなコミュニティが公民館とか図書館とつながるとか、場所はあって、やる気のあるお母さんはたくさんいると思いながら、それは小学校単位がちょうどよいのかなと思います。中学校単位だと大きくて、よそが見えないので、小学校区単位は、いろいろな方も見つけやすいのではないかと感じました。

【委員】前に勤務していた大宝小学校というのは栗東駅前にあって明治8年に創立し、今勤務している金勝小学校も明治8年創立です。小学校への地域の思いはすごいものがあります。自分の土地を寄進してきた経緯があり、栗東市ですと、金勝小学校、葉山小学校、治田小学校、大宝小学校の4つ学校には皆130年の歴史があります。

金勝小学校には、トータル12年間いますが、学校に用材がない時代には、地域が学校を建てるでという地域の熱意がある学校です。

現在、校長として11年目ですけれど、保護者と地域が創る、クリエイティブな学校をと思っています。私は校長になってコーディネーターの役割をしてきました。

例えば、ある学校において、自殺したいと言う子どもがいました。ちょうど生まれて2週間ぐらいの赤ちゃんがいるという話が入りまして、担任に赤ちゃんをその子に見せようと話をしました。その子は、家に上がって赤ちゃんも見るとなり、すぐに正座して涙を流しました。言葉は要りません。そのコーディネーターの役割が絶対必要です。

平成17年度から学校や公共施設は禁煙を始めています。教え子が地域で焼きそばを焼いたりして活動していて、祭りがあつたら遠いところで活動していたのですが、今度、小学校でやってもかまへんぞと言いました。9時までならバケツも貸すので、親子同伴で花火をしてもよいと言いました。

地域の琵琶湖清掃があつたら、地域の人達は学校への清掃にも来てくださるわけです。だから、学校というのは地域と共に生きているということをいつでも実感させられています。校長室の隣に、結いの間というものがあります。先ほど相談機能と相互扶助とおっしゃったのですが、結いというのは広辞苑でも出ていますが、お互いに田植えや稲刈りなどを助けたりす

るのが結いの精神でして、そのことを前から住んでいる人と新しく転入された人が混在している金勝で進めたいと思っています。

11月に金勝まつりというのを開催します。うちは子どもが500人いて、お母さんもお父さんも地域の人も来ますから、規模が1,600人ぐらいになります。

11基の臼を用意して、金勝で出来た食材を利用して金勝汁というのを作ります。スクール農園で出来た6升の米を使ったりします。そこに行き着くまでに20年の歴史があるんですね。そうだからこそ、頼まれれば運動場で夏祭りに櫓を建ててくださいよ、と言っています。小学校を核にしてというのはそのとおりだと思います。

退職間際になって、「自分大好き、友達大好き、学校大好き、家族大好き、金勝大好き」という5つの大好きが頭に浮かんだんですね。平成20年に出された教育立国の振興計画を読ませていただくと縦のつながり、横のつながりが書いてあり、今、システムづくりに苦勞していると思います。入り口は無いという話がありましたが、入り口はあるんですね。でも、入口があまりにも多いから動けないんですね。小学校がどのような願いを込めながら作られてきたかという歴史的なことをおっしゃっていただいているなと思いました。

【代表】具体的な施策事業を考えていく時に新しい理念の提示が大事なので、学校教育に対してなぜ社会教育委員が言うのかという反論も出るわけですが、学校教育を進めるだけの装置ではなく、地域づくりの歴史性とかシンボル性というか、きずなをつくる装置という面もあります。昔からそうであったわけです。滋賀県もそうであったし、京都も番組小学校と言われていました。当時の小学校は地域のありとあらゆるものに応えていた、コミュニティセンターみたいな学校でした。

その後の日本の政策で弊害を生んできたところもあるので少し問題提起をしつつ、できればこうした地域連携型の学校を中心とした地域づくりを滋賀県で広げたい、それにはこういったあたりからできないかという提案をしたいなと思っています。

【委員】学校を中心としたという発想じゃなくて、きずなづくりの接点が必要なんですね。人が結びつくときには、血縁だったり、あるいは職場の職縁だったりそういう縁という共通の接点があるから人が繋がるんでそういうときに地域できずなづくりを進めていく、縁づくりを進めていく時には接点が必要になってきます。

地域の人が一番多く関われるというのが子どもで、そう言う意味では、血縁、職縁そして、子どもの縁と書いて、勝手に子縁と言っています。また誰でもが関われる縁としては学縁、学びは誰でも出来るし、共通で学ぶあう人ほど仲よくなれます。

地域の中に血縁、職縁の希薄化があるなら、新たな人間関係、地域づくりだったら共通に誰でもが感心を持って育てたいのは子どもであり、子どもを中心とした縁づくり、学びを中心とした縁づくりが重要です。子どもを中心としたきずなづくりというのであれば、学校でなくてもいいわけです。

そういう視点でいえば、委員がおっしゃった寺子屋、お寺でもいいわけです。お寺でも子どもを中心とした縁づくりが出来るし、学校でもできる。そういった中で具体的に学校を一つのモデルに考えるんだよという発想でいいのではないのでしょうか。

【代表】細かいことを言えば、寺子屋と言ったけれど教会もあるなと思いました。

滋賀県でコミュニティスクールというと学校現場ではだいたいわかるのでしょうか。

【委員】今、地域一体型というものを日本全体にニーズとして得ようとしている時期に来ていると思います。生涯学習課は学校支援地域本部事業を担当しているから、地域が学校に入るという発想ができています。だけど、再来年になったら事業は終わり、元の木阿弥になるような気がします。

文部科学省の生涯学習政策局と初等中等局が一緒になればいいと思っています。イギリスでは、福祉や就労を見て学校をどうしていくのか、総体として施策をやっているわけです。今、日本では縦割りの中で一旦突き当たるのです。学校もそうで私も悩みました。

一時、学校が荒れたときがあり、3年間で何とか挽回して次の校長先生にバトンタッチしましたが、また同じ事が起こりました。基本のベースは一緒ですから、地域でそれを支える関心を持ってもらい、地域の中で解決するベースづくりをしようと思いました。そうしないと学校というところは人がどんどん変わっていく。先ほどの委員が話されたすばらしい地域のイメージを新しい人が来たら関心を持たなくなります。

【委員】そこがポイントだと思います。すべての地域、職員にお世話になっていて校長は点と思っています。

平成23年度から新しい学習指導要領が本格実施ですけれど、私の学校では、今年から英語活動に取り組んでいます。学校の授業枠は、5日間6時間で30コマあります。1年生の授業時間が25時間、2年生が26時間、3年生27時間、4年生は28時間の時もあるし、クラブ活動があれば29時間、5、6年生が29時間です。ということは月曜日の6時間目しか空き時間がありません。会議を今まで1時間半やっていたのが45分間しかできません。放課後、地域の人に来てくださるのを今まで木曜日にやっていたのが火曜日と木曜日に分割するようになりました。地域の人に来てくれたら、負担とを感じるのか、達成感とを感じるのか、現場から見ると忙しいのに、となるが、それをうまくコントロールできるものが必要になると思います。

私が、「地域と保護者が作る学校や、自分大好き、友達大好き、学校大好き、家族大好き、金勝大好きという子どもを作るんや」と言ったら、「そうや」とみんなが言える組織にしないといかんと思います。いろいろな先生方がいるわけですから、私としては、縁つなぎを学校でやっていかないといけないと思います。

【委員】学社連携、融合じゃなくて、今回はきずなを作ることがテーマだとしたら学校教育をどうするかじゃなくて、学校教育を良くすることが目標なのか、手段なのかという話です。

学校教育を良くすることが今回のテーマから言えば目的ではないと思います。学校を拠点としていかにきずなを作るのが最終目的であって、子どもを良くしたいというのは手段だとしたら、一番みんなにとってわかりやすい学校というものをモデルにしながらやっていくことを書く必要があります。

【代表】人育てのためにきずながあるやろうという意見もあります。

【委員】コミュニティのよさというのは国が法律で地域に権限を持っていくという大きく変えた法律だと思います。イギリスなんかは、法律を変えています。

県としての教育について、学校は学校教育課、社会教育は違うところというその概念が破られないままにあるから、何か頑張ってもエネルギーを出しても戻ってしまうことがあります。戻らな

いで何かピンの止め方がないかなと思うんですよ。

【代表】それで私の造語ですけども、4番目に産公民学際連携とって、物事をやる時には分けなくて、連携する、一緒にやると提言しているつもりです。法律や理念的に言っても現場は動かない、トップがマネジメントすれば動く、それがないと動かないのが現状かと思います。

【委員】昨年度、学校支援地域本部事業の成果報告会をしたら、管理職が沢山来てくれました。僕のところにどうしたらいい、どんなふうにしたらできると聞いてきます。県内の校長、教頭でやりたいというのはいっぱいいるけれど、学校は今限界に来ている。学校を中心とした豊かなコミュニティづくりをしようと思っているけれど、市町、県にお金がないのが現実です。お金が無くてもできることがあるのではないかと思います。

【代表】コミュニティスクールの伝道師事業というのを起こして広げていただきたい。内発性が大事であって、変にシステムができて補助事業だ、予算がついてということではなく、教育委員会にそういう人を雇っていただいて、行脚してもらおう。

年に何回か集めて研修もいいんですが、現場で応えて、指導していくことを4、5年間取り組むと第二、第三の高木委員、松本委員が出てくると思います。

【委員】学校教育のモデルという話が出ましたが、親のモデルも必要でそれをどう作っていくかが課題です。公民館をNPOが借りるのに、お金を取ったら貸しませんと公民館に言われる。NPOは思いはあってもお金がないという現実です。場と人とをどう育てるのかのかが課題で学校を動かしてくださるといい。

【代表】せっかくのノウハウが社会化されないのがもったいない。仕組み上一つのところに、何年もずっと支援できないのは仕方がないにしても、滋賀県全体、伝道師として指導できると変わってくるのではないかなと思います。

【委員】伝道師になっていただきたいのが願いです。社会教育施設について少し書きましたが、三つ子の魂百までと言われてますけれど、子どもは1歳から1歳半まで一生懸命、母親の真似をして親の気持ちや表情など自分に取り込みながら、親を慈しみ、育ちます。でも、0歳から1歳までの大切な時期に親が働かねばならないものわかります。社会や地域が自分だけの子どもじゃないという気持ちで育てるような施設ができればいい、それが支えあえる社会だと思います。

ある施設に行きましたが、死に際、人間の締めくくりにも生き甲斐が見られない。家で看取れるのが一番いいのだが問題もいろいろとあります。人間一生涯勉強であるという認識が必要であって、生涯学習という意味は死ぬまで自分は何だろうかという勉強をしつづけるということで、大人も勉強させていただいているというボランティアの意識も大切です。

昔の寺子屋は、小学生だけでなく、20歳ぐらいの人もいました。知識を学んで、人間は人間として、先輩は先輩として学びあうものがあったからこそ地域が支える一つの場としての寺子屋という教育の場がありました。今は、バラバラの教育になっています。

生涯学習の中の学校教育、コミュニティスクールの実験的なものに絞り込んで、その一つの例が岩根小学校であり、また一つの例がNPOチッチの保育の問題であるということを書けば、一つの指針になるのではないかと思います。

【委員】学校教育、社会教育の概念崩しをどうしていくが今後必要です。

東京都のある地域ではNPOが学校を仕切って変えています。日本社会としても学校の概念を

崩そうとしているのが今の国の施策です。いつまでも学校教育、社会教育と言っている概念を崩せないかなと思っています。

【委員】 保育所を各党は支持しているが、働かなくてもいい人が預けている親がいます。どうやって親になるか学びがありません。子どもが小学生になった時に、初めて子育てに触れる人もいて、今小学校が大変な状態になっています。働く親を助けることも大きな流れだが、親の学びがどこかで必要でそれが社会教育と思います。

家庭保育という取組があるが進んでいません。人がついてもうまくいくとは限りません。ついたからいいというのではありません。思いをどう具体化するか、永続的発展ということから見てどう伝えるかが課題です。寺子屋が小学校や図書館、公民館を借りることができるといいです。

【委員】 寺子屋に誰かが来て、いろんな人が交わってくれるといいです。地域の人で特色がある人がいるので、こんな人がいると知ってほしい。育てあうことができるといいと思います。

P T A会長と話をしていると子育ての仕方がわからないから預けているという話が出た。世代が切られてつながりがなくなっています。

遺産相続について話をしている時、相続とはお金や土地のことではなく、年配の人が次の人に伝えていくことが本来であり、今、それが切れている時代だから正しく相続できてないという話になりました。だから子育てのこともわからないようになってきているように思います。

【代表】 今回のテーマは深い意義があります。テーマの地域のきずなに戻っていきます。縦割りでお任せではなく、自分で支えていくことがどこまでできるのか問うているわけです。視点の5番目にあるコーディネート論に取り組んでいますが、海外では調整役、マネジメント、人材の育成はできているのでしょうか。

【委員】 イギリスでも様々なスタイルがあり、うまくいっているとは限りません。

学校支援本部事業で地域コーディネーターが学校に入り、価値観が変わっています。いろいろな価値観が入ることで教職員もイメージが変わっています。学校という狭い枠だけで縛られてくると荒れた時に取り戻しがききません。価値観がいろいろあると柔軟性があります。

【代表】 学校、図書館、公民館でも一つの価値観があります。まちづくり型社会教育施設を進めるためにコーディネーターがいろいろな人を取り入れたり、企画をしたりすることが大切です。おもしろい形でできないかというのが問題提起のところですよ。

学校支援地域本部事業は、22年度で終わるけれど何か続く方策がないのかと考えています。

【委員】 文部科学省に行った時に生涯学習政策局と初等中等局が一体となって施策を考えてほしいと話してきました。コミュニティスクールの指定が終わって職員が減り、私ひとりでコーディネートなどをやってきて大変でした。学校支援地域本部事業が始まり、地域コーディネーターがつけましたが、事業が終わればいなくなり、次の校長が大変になります。

将来的に、N P Oというか支援組織を作ってお金を導入できるシステムを作ろうとしています。

【代表】 一つの方向としては、自前でコーディネーターをまわす仕組みを編み出すことで、必ずしもお金ではない部分があります。

教員の中でコーディネーターに向いた人もいるし、地域の人がボランティア活動として週3日ほど机だけ置いてやっていくというものもあるかもしれません。

制度が無くなれば自前で何とかしないといけな
いかなあと思います。そういうことについて相談
に乗ったり、アドバイスする伝道師兼オール滋賀
のアドバイザーに委員がなっていたらとい
うのが私の提案です。

【委員】新潟県では、県や市がコーディネーター
やボランティアの組織を持っています。例えば、
そこが学校にコーディネーターを派遣しています。
派遣と言ってもよく聞いてみるとその人の母校で
あったりする。地元で活動するのが一番大事で、
いかに人を見つけ出すかが重要です。



うちの場合はコーディネーターが1人ですが、事務系のコーディネートと人をつなぐコーディネ
ートとにいくつか分け、その人が持つ強みを生かしています。

それがうまくいくかどうか、それを調整するのは校長だと思います。教頭は学校の中の運営を
きっちりとしないといけない。連携というのは会議をすることではないと言ってきました。先ほど
委員がおっしゃった地域の感覚と学校の感覚を重ねていこうという価値観の共有です。校庭に地
域の人と一緒に櫓を建てていいのか、管理上困りますと言うのか、その感覚です。

子どもは帰ってから鞆を置いてから遊ぶんですよというのが今までの輪切り型の感覚ですが、
でも、遠い所ならそんなことできない、と子どもが言うと、それはそうだ、放課後に子どもを遊
ばせてやろうや、という感覚が出てきます。そのことで今まで持っていた子育てのイメージが変
わってしまいます。

そうなると活動をしたいという人が、学校と一緒にやりましょうということになります。その
柔らかさをお互いが持ち合わせ、やっていく起点がコミュニティの中の地域の組織であると思
います。同じ高さで協力してあっていくというスタイルがコミュニティの感覚です。それが持てる
か、持てないかが重要です。

【委員】異動で校長が変われば学校が変わる。その概念は正しいけれど、若干課題があるな
あと思います。提言をいただく中身は受け身的でなく、前向きな発想だと思います。例えば、学校の
課題を共有していきながら校長や職員が変わっても地域が変わらないようにすることが大事で
す。

特別支援学校の子どもが地域交流で、学童（放課後児童クラブ）へ行った。8月31日まで一
緒に活動し、夏休みが終わったらなぜ〇〇さんは来ないと子どもが言います。地域で育っている
子どもは、学校も学童も一緒や、という感覚ですね。まさに子どもの発想です。

校長が変わっても地域が変わらない。そのとらえ方をきっちりとしないと学校も地域も良くな
らないと思っています。

【代表】学校をテーマにしつついろんな切り口でぎっくばらんに話をしてきました。たたき台を
作って、みなさんとやりとりしながら、滋賀県の社会がはっとするような提言をしたいと思っ
ています。

【委員】今回の会議でキーワードになったのは、強力な指導者ということです。崩していくため

には強力な指導者が必要で、伝道師となって広げていくことが大事だと思います。

寺子屋というのを具体的にどうするか、寺子屋が持っていたものを今、どんな形で持ってくるのかというのがもう一つのキーワードだと思います。

NHKでは通信制の学校を運営しています。そこには様々な年代が集まってこられます。いろいろな立場の方がおられ、ある種のコミュニティができています。それが一つのきずなであり、寺子屋になるのではないかと考えます。

【委員】鎌倉市で青年会議所、J Cが主催になって寺子屋をしています。ひきこもりの子どもを引き取って、森下先生と池田教授が組みまして「鎌倉てらこや」ということで取り組んでいます。お金はJ Cが集めて、運営は早稲田大学の学生がしています。ひきこもりの子どもと親と一緒に合宿させています。親が変わらないといけないという取組を全国に広げようとしており、参考になると思います。

【代表】時間が来ましたのでここでグループ協議はお開きにして、全体会を行います。

< Bグループの概要 >

【副代表】学校を拠点とした地域連携と新たな学校運営の創造ということで、岩根小学校にお伺いし、校長先生や地域が一体となって素晴らしいお取組をされているところを見せていただき、感動いたしました。すべての学校があのような形で、地域づくりとか、まちづくりをするようなことは結構難しい面もあるかと思うのですが、やはり学校を拠点とした地域連携は非常に大事なことであり、学校運営の中にもそういうことを取り入れて考えていこうということで、頑張っている管理職の先生や一般の先生方がいらっしゃいます。

まず、最初に学校を拠点とした地域連携ということで、皆さんから自由にご意見をいただければと思います。委員から資料を提出していただいておりますので、最初に口火を切っていただけるとありがたいです。

【委員】公民館のお話を聞いたり、野洲の図書館に行かせてもらって、まちづくりを取り入れた運営を今回たくさん学ばせてもらいました。今、小学校におりますので小学校に置き換えて、どういうやり方ができるんだろうかと考えました。



素晴らしい岩根小学校の実践を見せていただきました。あのような取組はなかなか難しいところもありますが、今回提案したのは基本的な部分で、滋賀県みんながこういう基本的なところの土台に立ったらどうなんだろう、というような提案です。

既存の取組の拡充・発展で、提案内容の施策名を「まちづくり型の小学校」というネーミングにしました。学び合い、支え合う仕組みづくりという部分で、背景には、教育基本法が大きく改正をされたことがあり、教育の目標が規定されたというのは、本当に戦後初めてのことです。その中に伝統と文化の尊重とか、環境の保全、生命や自然の尊重、あるいは社会の形成に参画する

態度とか、そういうことが明記をされたことが一番大きな変化です。

これを具体的に、学校でどうしようにするのかと考えた時に、教師の意識改革とよく言われますが、本当に根本的に変わっていかないといけないと思います。

全員の教師が学校に専門性を取り入れるコーディネーターの役割を担うことが大事です。今も学校にコーディネーターを置いておりますし、学校の方ではそういう窓口が必要なんだよ、ということで進んでいます。しかし、そういう発想からさらに進んで全員がそういった意識をきちんと持って仕事するということが必要なんじゃないかと思っています。

また、社会教育においても「学びを生かす活動から支え合う活動」と大きく変わっています。これも大きな驚きでして、支え合うという部分をどういうふうにみんなが意識化したり、実践に結びつけていくのか、これも本当にやりたい人がやるのではなくて、本当にそうするのが当たり前みたいな風土を作っていくためにはどうしたらいいのか、ということが、今求められているんじゃないかなと思います。

次に、NPOや各種市民団体は、市や町、あるいは県域で活動されていることがあるわけですが、小学校区と結びつきにくい部分もあるんじゃないか、というような点をとらえて、ネットワークづくりをきちんとやっていくべきじゃないでしょうか。

そういうことで、3つの背景から考えてみました。あまり大きな部分は難しいかなと思いつながら、どの学校でもあるいは社会教育に関わるすべての人が、意識を持って、小学校区を土台とした学びの循環づくりを進めていくことを考えました。現在、社会教育では、現代的課題が学習に取り上げられていますが、小学校への支援を義務づけたらどうなんだろうか、ということです。

具体的には、社会教育施設を利用される方、例えば公民館サークル、公民館や図書館の講座の受講者に地元の小学校の支援をやっていただくということです。

また、社会教育関係団体は小学校の支援をされているわけなんですけど、やはりその発想がすべて共通したものを一つ作っていくということは大きな動きになると思います。自治連合会とか社会福祉協議会とかが支援をしていくということを明文化してはどうだろうか、ということです。

その支援の内容としては、学習支援、環境整備支援、安全支援、後方支援というようなことで、それぞれの方の特色あるいはそういうサークルの内容の違い等で、いろんな形ができると思います。

小学校でも現在やっているわけですが、地域人材を生かした学習づくり、それからカリキュラム編成をやっていく必要があります。学校目標も、地域のまちづくり協議会とタイアップしながら地域課題を反映して、学校目標の設定を行い、そこに自治連合会、各種団体、社会教育関係団体、NPO、各種市民活動団体が、学校ボランティアという形での関わりの中で、学校を運営していくようにします。それは、コミュニティスクールと変わらないじゃないか、ということもありますが、「まちづくり型小学校」ということで社会教育も主体に、ただ部分的な学校との連携をするというよりも、イメージとしては学社融合型になると思います。お互いがお互いのやらなければいけないことをやる時に、自然に重なりあってくる、という主体性を持った関わり方をしていくという部分が、コミュニティスクールの運営のやり方とは違うところです。

そういう意識変化の啓発がすごく大事になってくるんじゃないかなと思います。また、これは小学校への支援というレイアウトになっていますが、その部分が無理でも社会教育がまちづくり

を支える循環を形成するための施策がいろいろと考えられるのではないかと、思っています。

【副代表】ありがとうございます。今の提案をいただいたわけですが、皆さんの中からご質問がありましたら、お出してください。

【委員】私たちが願っている学校の姿が書かれていて、本当にこういうことが実現できたらいいな、と思います。けれども、先生方が、実際には、目の前の子どもたちに教えなければいけないことで手一杯で、しかも今は親御さんとの対応もあり、ゆとりがありません。その中で、それぞれの先生が、さらにもうひと枠広がりをもった専門性というんですか、そういうのを身に付けていかれる。それも、お一人じゃなくって、そういうレベルにすべての教師の方たちが達していられるには、少し長いスパンと特別なシステムなど、大きな改革を前提としないとできないんじゃないかな、と思うのですが、そのあたりは実際にどうでしょう。

【委員】個々の先生が「ああいうことをしたい」、「こういうことをしたい」という意欲を持っていることをすごく感じるし、そこですぐにやれる先生はどんどんやっていけます。

ただ、学校にいますと、周りからの断片的な情報は文書とかでいっぱい来て、「こういう体験活動があります」とか「こういう専門的な方がいます」とかは入ってくるんですが、顔の見える部分は反対に少ないです。そういう意味で、実際にもう少し専門性を持った方が学校の方にも向いていただけたら、ずっと進むんじゃないかな、と思います。

もっと社会教育の方が「これはしますよ」「しないといけないことになっているからやらせてください」とそんな感じで入ってきていただけると、お互いの責任でやっていこうという形での関わり方ができます。今の段階だったら、教師が全部仕組んで、設定し、地域の方をお呼びしています。お呼びした時からは動きは活発になるんですが、そこに行くまでに学校のコーディネーターの先生がいろいろ情報を取り入れていくんですが、時間がありません。

だから、校長や教頭の方が地域に出ていることが多く、情報を知っているので、そことつなごうと思うんですけど、なかなかそういったことをする時間的な余裕がなくて、「こんないい人がいはるんやけどな」と思いながら、1年1年がたっていくというのが現実です。

【副代表】今、学校にコーディネーターは、全部配置されてないのでしょうか。

【委員】教員が校務分掌として1人各校に配置しています。

【副代表】その方が実際に社会教育に理解のある方ならいいけど、一つのポストとして、「あんた、今年は、コーディネーターやで」という形になってないかなという点を考えます。

確かに学校の先生は、ゆとりがない現状を、皆さんもよくご存知だと思います。そこで社会教育と学校教育をつなぐ学社融合とおっしゃいましたが、そういうことが非常に大事です。

コーディネート力のある先生がいると、その学校はスムーズに地域との連携が進んでいます。

【委員】コーディネーターの先生は、コーディネーターとしての仕事の時間が確保できるんでしょうか。もともと学校の教員としての仕事はありますよね。あくまでもプラスアルファとして関わるといえることでしょうか。

【委員】教員はみんなそれぞれ校務分掌として仕事を分担していますので、その一つとしてという感じです。ただ、地域と連携していることはものすごくありますので、地域の会議に出たり、学校でいろんな行事をしたり、あるいはそういった事業の学びをつなぐ、ということで本当に毎年積み上げています。じゃ、これでも十分できているか、というと決してそんなことはなくて、

なかなか次の一步が動き出しにくい。その起爆剤というか、そこから動くという部分での提案ではあるんです。

【委員】コーディネーターの任期というのか、ずっと同じ人がやられるのか交代で学校でやられるのか、先生の異動もあると思いますので、経験というはどのくらいでしょうか。

【委員】本校で言えば、今年新しい先生がなってきます。担任じゃなくてフリーの立場の教員が担当しています。

【委員】今、しが文化芸術学習支援センターでコーディネーターとして年間100回ぐらいの授業を小中高、特別支援学校に入っていますので、いろんな学校を見せてもらっています。

実際のところ外部の専門性のある方とどうやって授業ができていくかという、学年の担任の先生と話し合いをし、それを教頭先生なり校長先生が許可をし、具体化しているというのがほとんど現実です。

草津市では、地域協働合校の取組があって先生型の意識が全体として高いですが、他の市町だと、あて職に近くて、意識の差とか動きの差があります。

さっきおっしゃったように、全教師がコーディネーターというぐらいの意識で、具体なところを一つひとつ経験を積み上げていくしかどうしようもないのかなと感じます。

いろいろな情報や優れた人との出会いの場面がなかなか持てないというのもあります。私は結構入っていたので、学校とつながっていったのですが、なかなか外部からは入れません。つないでくださる学校側の先生がいたので入れました。

生涯学習課がここ3年ぐらい、企業やNPO、文化施設側が学校支援できますよ、という学校支援メニューフェアをされています。皆さん必死に午前中から準備をして、学校の先生と会える、こんなプログラムを紹介しようと思って、あれはすごい数ですよ。50か60ぐらい参加しているんです。先生方も100人ぐらい参加しているんです。でも、会う時間が少なくて、短い出会いでないかと感じました。

学校の先生が日々の激務の中で、アンテナを探せ、探せと言ってもなかなか難しいので、何かせめてそういう出会いと情報交流の場を、丸1日たっぷり取れるようにする。

例えば、〇〇さんだったらこんなことができます。私ならこんなことができますとか、そういうものにじっくり出会って、つながれる場面はないかなあと思います。

【委員】委員が各学校を回られたときの、最初にコンタクトをとるのは学校の中だとどこへ行くんでしょうか。やはり人間関係ですか、個人的な担任の先生とか。

【委員】最初は生涯学習課に先生がおられて、学校とつないでくださいました。

【委員】大学には、小学校、中学校からいろいろなスポーツ関係の「何かこんなことができる学生さんはいませんか」「こんなことをしてほしいんですけど」というのは、必ず個人宛でくるんですよ。私のところなんかにも、「キャンプファイアーを指導してください」というのが来ます。

先ほど言われたように、一括にいろんな分野が1日で全部やってしまうのは無理なので、テーマを決めるのもいいと思います。1回行って、全部まちづくりから環境から自然などいろんなところを順番に回れないので個人的な興味があってもいいのではないのでしょうか。

今日は環境について、企業さんとか民間が来ているブースがあるから、そこへ環境に興味のある先生が、自分の授業で何とかしたいな、という先生がいれば行ってもらうようにする。

そういうふうにしていかないと、ちょっとコーディネーター役、プラスアルファの仕事です、と言われたら、しんどいんじゃないか、という気がしました。

【委員】次の学習は何をしよう、カリキュラムの中にこんな人が来ていただいたらいいな、というのが、本当に差し迫ってニーズとしてあるのが学年の先生です。

実際に取組はそういうのが一番いいのができるんです。単に単発じゃなくて、結構きちっとできているのがあります。例えば田植え体験とかそんなのも年間を通してできていますが、そういうように外部からもっと来てほしいなと思ったときに、一番アンテナを張っているのは授業をしている先生です。

【委員】そこでこんなのがあればいいなあ、というような声かけがあるかないかで、それこそ来週のことなんかじゃなくて、1学期に2学期ぐらいの見通しで決めていきますので、そのあたりのタイミングがうまくあえばもっと学習の中身も充実するだろうなあということをいつも感じております。

【副代表】口で言うのは簡単ですが、私も校長をしていた時、実際はなかなか、うまくいかなかったと思っています。

次は、視点3のまちづくり型社会教育施設の育成についての話に移ります。

公民館のあり方については、すでに以前、社会教育委員会議会で十分話し合いをされておりますが、現在、公民館連絡協議会では公民館検討委員会を立ち上げ、滋賀県の公民館はどうしたらいいのか、ということでのいろいろなことを考えているところです。

現在、公民館の運営などが大きく変わってきている時期で、この前も、社会教育施設の公民館のことについて触れだすと、どこまでいくのか分からないほど複雑になってきているなあと話をしていました。

それでもやはり公民館というのは、まちづくりの拠点だと思えます。学校の先生方はパンク状態の中、頑張っていたいただいているのに、さらに学校に対してあれもしてくれ、まちづくりの何かをしてくれと言うのは難しい。公民館がもっと頑張らないといかんなあと思っています。

しかし、人員削減で、今まで5人ぐらいでやっていた公民館も2人か3人で、しかもそれが非常勤職員で回っているところもあります。

この前もある町の社会教育委員さんが、「地域の公民館へ行ったら、知らない人ばかりだった。館長さんは大津の人で職員さんは京都の人で、地域の人はいない。しゃべりに行っても、何か話が合わへんねや」とおっしゃっていました。これで本当にまちづくりの公民館かなあと。やはり根本的なことですが、そういうようなところを考えないといけないと思えます。

あくまでも行政サイドの方は、経費削減、民間でできることは民間で、というような形で公民館まで改革を進めています。

また、公民館を教育委員会から首長部局に所管を移している状況もあります。

まちづくりの拠点は、社会教育施設、特に公民館ですので、もう一度公民館の原点に立ち戻って、公民館をどのようにしていくのか考える必要があります。

ただ、これまでのように、館長や主事が「こうせい、ああせい」というような形の教育は絶対に合わないと思えますので、NPOの皆さんとか地域の社会教育関係団体、皆さんのお知恵を拝借して、皆で一緒にやっついていかないとはいけません。

地域には素晴らしい人はいくらでもおられます。その方たちをボランティアという形で、いろいろなお知恵を拝借してやっていく。そういうことがやっぱり地域づくりにつながっていくんじゃないかと思っています。

【委員】図書館というのは、地域におけるハブ、継ぎ手だと思います。図書館には情報があります、本があります。ただ、それだけではなくて、いろんな人たちが集まって、いろんな情報が集まりやすいところです。何かあったら「図書館にちょっと行ってこようか」というところの集まりやすさがある。

公民館は今、言いにくいのですが、公民館族という人たちが、施設利用の固定化を図っていらっしゃるというところが若干あるんじゃないかと思ひ、入りにくさを感じます。1週間、1月、1年先の予定を見ても、会議や研究会が入っています。

つまり、私は公共空間という言い方をしますが、公共空間としての公民館の隙間が無くなりつつある。公民館も博物館もコミュニティーセンターも図書館も、ある共通の空間を共有すべきだろう、と思っています。そして、シャッフルして、その事業は、コミュニティーセンターでやりませんか、その日は図書館が空いていますから、やりませんかとか、隙間づくりをしないといういろいろなきずなづくり、仕掛けだ、人の寄り合いだとかできない状況が出てきている、ということを感じています。

同じように学校との関係も、学校は地域の人材を求めているというのはよく分かるので図書館が学校に出向くとか、人材を図書館のほうも把握している場合もありますから、紹介をします。

小さな接点と言いますか、「今日は、わらじ作りをやりましょう」みたいなことで仕掛けを作る。その仕掛けのハブみたいなものに図書館なり公民館の持っているノウハウを活かせないか、博物館も含めてできないのかと考えています。

公共というのは英語で言うとパブリックです。ヨーロッパで言うパブリックというのは、いわゆる公営とか公設ではないんです。みんなが寄り集まるパブです。お酒を飲むパブですよね。集まるからパブリックなんで、公設であることがパブリックではない。そのこのところ、意識変革をして、じゃあ、パブリックである施設をみんなが使おうじゃないか、という意識変革が大事だなと考えています。

【副代表】まちづくり型社会教育施設ということですが、確かにパブリック、みんなが集まって、そこで活動できるといいですか、気楽に行けるということでは、確かに図書館というところは非常に行きやすいですね。別に本を借ることもないし、ふらっと立ち寄りますが、公民館というと確かに、ちょっとそういうところに行きづらい点もあります。我々も反省しないといけないと思っています。

【委員】図書館だと本を読みに行く。児童館だと子どもたちがそこへ遊びに行く。公民館と言ったときに、何とか教室があるから公民館に行く、というのは分るんだけど、何もなしに公民館に行くことってあるのかな、と話を聞いていて思いました。市町村合併で、昔は小さい公民館がいっぱいあったのが、合併されて、大きなエリアの中にぽつんと一つあったりという状況なんですか。

公民館は、もともとあった小さな地域の拠点施設としての役割をだんだん果たさなくなっているのかなと、そこらあたりはどうなっているんでしょうか。

【副代表】確かに図書館だったらぱっと入りやすいです。公民館に人が来られましたら、「何かご用ですか」とつい声をかけてしまいます。「別に別に」とパンフレットを見て、「何か教室がないかな」と言われます。そういうところがちょっと行きづらいかも分かりません。

公民館の数も、今までは小学校区単位できちんと整っている。例えば大津市なんか全部そうです。出張所と公民館が一緒になっています。

県内には、小学校区単位であるところと、中学校区単位のところがあります。彦根市は中学校単位でしたので公民館の対象地域が大きいです。市町村合併で公民館を経費の面ですぐなくしている、というようなところもあり、なかなかその辺のところは難しいです。

【委員】今、自治会が自分ところの自治会館みたいなところを持っているじゃないですか。

そういう自治会だとかいろんな人がそこをベースとして使えるような形にしていけば、何か催しじゃなくてもいけるのと違うかな、という気はしているんです。

【委員】公民館だけじゃなくて図書館とか、いわゆる枠組みをもうちょっと組み直しというのがあってもいいのかも分かりません。

【委員】私も子どもたちや子育てサークルとかのことで公民館に結構行きます。公民館の使いにくさの問題点は前からあって、私たちが出した答申も何年も経っているんですが、あれはいったいどこに届いているんだろうと感じます。

【副代表】おっしゃることもごもっともで、私も公民館へ行っても非常にやりにくいことがあります。

公民館職員研修では、グループでワークショップをやりまして、うちの公民館で実際にお客さんにどう対応しているか、ディスカッションしたことがあるんです。どのようにすれば気持ちよく公民館を利用していただくかということについて研修をしました。急にできるもんじゃありませんが、これは非常に大事なことだと思います。

非常に行きやすいというのが、社会教育施設の根本じゃないですかね。

学校でもそうです。業者さんが、職員室に入っても知らん顔するところもあるし、気軽に声をかけてくれるところもある、学校によって全然違うとおっしゃっていました。その辺の職員の資質は大事なことです。

【委員】先ほど言われた、シャッフルという言葉はものすごいなと思ったんです。要するに社会教育という恩恵を受けることについて、公民館に行って学んだり、あるいは一緒に集まれるということに対して、そういうことができる状況にあるからできます、みたいなことで当たり前になっていっていることがあります。

講座や研修に参加する人と参加しない人との溝もあります。

社会教育がどんどん充実すればするほど、人と人の間でグループみたいなもののきずなは深まるが、それ以外の人と非常に差があるという感じがします。

やっぱり今回の小学校の案も、小学校に限らず、学んだことを生かすだけにとどまらないで、助け合うところまでやっていくのが当たり前です。それが本当にパブリックですよという、意識改革をみんなが進めていったら、社会教育そのものがもっと変わっていくんじゃないかなと思うし、地域の雰囲気もものすごく変わっていくんじゃないかなと考えます。

いいのかどうか分からないですけど、義務化することで、自然にそれが風土化していけるよう

な、そういうポイントが今は必要ではないでしょうか。そういう全員の意識があれば、自然にいろんなところでシャッフルが起こって、次の世代にこういうことを伝えたいという気持ちを持ってもらう人がいたら、自然に小学校にも、もっと来てもらえるだろうし、本当に関わりあえる仕組みができていくほうがいいんじゃないかっていう気がしているんです。

【委員】今、学校では総合的な学習の時間があって、地域だとか校外へ出ていったり、あるいは学校の外からいろんな指導者を呼んだりするのは、結構やられているんですか。

【委員】地域のほうが支援をしてくれるような雰囲気になってきていると思うんですけど、差があります。もっと滋賀県全体がそういう雰囲気になってきたら、すごく変わるんじゃないでしょうか。今まで先進地に行かせていただいて、こんなふうになんか人の気持ちが本当変わっているということに、驚かされるが多かったです。そういうものがもっと全体に、どうしたら広がるのか考えています。

あそこは素晴らしい方がいて、あるいは何かいろんなことがタイミングよく行われてできた地域であると、思わないで、もっと全体にどうしたらなるのかと思う時に、社会教育に対するみんなの意識とか、あるいは生涯学習をする中で気をつけることを、もっと共通理解をすると、それが自然にまちづくりに向かうと思います。

ただ、まちづくりという時に、ノウハウであるとかハードであるとか、そういうところは結構市町には意識の高い方がいますが、いったん教育的な部分をまちづくりの中に持ち込んでいこうということが割と抜けているんじゃないかなという気がします。

【委員】学校教育の観点からすると、総合的な学習の時間という観点で地域に目が向いていると思うし、逆に社会教育の観点で学校の先生は地域においてどんな形で頑張れるのかなということも思います。総合的な学習の時間の中で培った関係から先に行くのかなという気がします。

学校教育の観点でいうと、うまく地域を使いながら、総合的な学習の時間をやっていかないとはいけません。

校長先生という立場で、地域もうまく巻き込みながら、そのベースとして小学校区の地域づくりを考えていこうというのもあるのかなと思います。

【委員】学校では、学校保健委員会でも健康推進委員さんに来ていただいていますけれども、総合的な学習の時間だけでなくすべての部分で、広がりのある、専門性のある、あるいは本当に強い人間的な魅力のある、そういう方の登場というのは待ち望まれるところで、学校のすべての面で必要だと思います。

【委員】まちづくり型社会教育施設というと、文化施設、社会教育施設を地域に開け、開けと言っているんですけど、そこでどんな人が育っていくかという部分で、私はボランティアやコーディネーターの育成にずっと関わっています。

新しい国立とかの文化施設だと、ボランティアは3年で1回終了するようにしています。でないと、新しい人が入らないんですね。

実際、福岡に新しく国立博物館ができて、オープン当初はすごいボランティア登録者数で、人気がありました。一度、組織化されたんですけど、何年かたっていくとどんどん主ができてしまって、中にいた子育て世代の人たちが追いやられる。「私ら毎日来てるんや。あんたら何や」と言われて、若い世代が全部つぶれていって、年齢の高い方ばかりが残ってしまうことがありまし

た。

なので、開けば開くほど、今度はどういう人がそこで育つかという責任が、施設側に生まれてきます。

社会貢献型人間をつくり、その人たちがまちづくりの視点を持つように、施設側は開くと同時に人を育てることが大事です。

例えば公民館、図書館、博物館である程度スキルを学んだら、今度は公民館や図書館、博物館を応援する人になるということです。今はもう施設が人を抱えるんじゃなくて、いったん抱えるけど期間限定で育てる。人手も少なくなる中で、NPOとして多少なりとも頑張って予算を取るなりして、外から応援するとなると、非常にバランスがとれるという、そういう時代に入っていると思います

【委員】図書館で、「町は仕事でできている」という特集をしたことがあります。町中にはいろんな仕事が集まって、町を作っています。お店屋さんがあり、工場がある。そういうような、町というのは仕事で構成されている集団です。おれのところの会社はこんなことをやってるんだという、産業博物館化しても面白いと思います。今一番博物館が隙間があります。

【副代表】視点3の、産公民学際連携型まちづくりの推進ということについて、お願いします。

【委員】先日、彦根市内の異業種交流会で滋賀県立大学へ行きました。普段から滋賀県立大学は、産学連携でお世話になっているんです。その時、学生さんがちょっと時間をください、ということで、お話を聞いたら、非常に良いことをやっておられるんですね。

滋賀県立大学では、地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する、これをモットーにいろんな活動をされています。その中には、まちづくりで、町家を直して、地域の集まる集会所にしたり、ちょっと山奥に、鳥居本というところに男鬼（おうり）という集落に、古い家で比較的しっかりしているところがありまして、そこを学生さんの手で改修されて、小学生対象の夏のキャンプをされたりしています。それから、蔵が残っているところを改修して、やっぱりそこも地域の集会所になったりということで、いろんな活動をされています。

ただ、この活動がなかなか一般の人にPRされていないんですね。その辺の学校と地域とのパブリックリレーションというのか、皆さんに知ってもらおうということが、ちょっとまだできてないなというのを感じました。お互いの目指しているところをうまくマッチングしていけば、いいものができるんじゃないかなと思ひまして、世の中にこういう動きをされている方がいますよということを、知ってもらいたいなと思います。

【委員】大学で、地域地域といいながら、学生がそんなに動いてないですね。ただ、地域総合型スポーツクラブというので、いろいろなスポーツ教室をやっと始めたかなというところですか。スポーツがキーワードになっています。ただ、一般地域全部じゃなくて、あくまでもそのスポーツクラブに所属した会員さん向けに、いろんなスポーツ教室を始めている段階です。

地域に先生方が出かけて、健康だとか、キーワードで、公民館で健康教室を始めたところですか。それも、公民館から依頼を受けてやっていて、大学自ら何か出ていくというのは、まだこれからかなというところですか。

地域からの要請を受けて、大学がどう動くのか。言ってもらえれば動けるんだけど、話がないと出ていきにくい部分があります。逆に、先生方は自分の研究分野があるので、その分野に関し

ては、例えば小学校に出て行って、「すみません。データ採らしてください。その代わりに学生も一緒に出て行って、体育祭を一緒にやりましょう」という形では動いてるんです。

そういう意味では、やっぱり県立大学の場合には、地域ともある程度ネットワークがあります。

うちの大学は、ほとんど県外からなので、県立大の場合には、卒業生が地元ですでに何かやっていて、ネットワークがしやすい部分があるんじゃないのかなという気がします。

【副代表】県立大学の学生がよく公民館に来て、いろんなことを勉強しましたし、また彦根の民家に行ったりとか、とにかくいろんなことをやっています。大学も、地域と連携しないと、学生が集まらないというので、地域からたくさん学生が来るようにということで、いろんな素晴らしい取組をされています。大学も産公民学際の連携のまちづくりをやっておられます。

【委員】今やり始めていることでは、瀬田に大型のショッピングセンターができたんですね。その経営方針の中に、町の人々が行き交う広場づくりというようなイメージがあって、大津市の子育て総合支援センターと、私たちNPO、それから龍谷大学の地域社会福祉学科の学生さんと、企業の4者が共同して、ショッピングセンターの中のコミュニティールームという1部屋を借りて子育て支援の活動をしています。

企業はその場所を無償で貸しています。学生さんはそこをフィールドにして、テーマを見つけて卒論を書いています。5月20日にオープンして、毎週水木曜日の朝10時から2時まで開けています。

そのコミュニティールームは、普段は会議室になるんです。でも、その時だけは全部中を片付けて、遊具を出して、主に乳幼児、3歳ぐらいまでが大半で、親子連れが来て、ゆっくり遊んで帰っていただくというようなことをしています。時々、ベビーマッサージや、簡単なおやつ作り、親子リズム、読み聞かせみたいなことをやっているんです。遊具は、大津市が無償で提供してくれて、1人だけ、パートタイマーとして専属の職員を派遣しています。あとの運営は全部NPOがしています。毎月その4者共同で運営委員会をしています。現在、300組近い登録があり、人数にして500人を超えるという形で、ニーズがあります。

お母さんによってはお弁当を持ってきて、朝からずっとそこにおられます。スタンプカードを作って、いっぱいになったら何かプレゼントがあるということをしてるんですけど、皆勤賞のお母さんもいっぱいおられます。何でこんな天気の良い日に、こんなところに来られるんだろうみたいに、私は思っているんです。ニーズはものすごくあるし、つながりを求めて来られているなと思います。

その地域は新しく開発された地域なので、地域の地蔵盆のような伝統的な行事ごとも何もない自治会なんですね。だから、地蔵盆に代わる祭りをこの夏にしようというので、そういうことも地域の民生委員さんたちとも協力しながらやろうということもやったので、乳幼児を抱えたお母さんたちの行き場所は、だんだん広がってきているし、そういうところでの連携ができてきているかなと思うんです。

今一番気になっているのは、やっぱり就学の時期です。小学校に入って高校を卒業するまで、もうちょっと狭めたら中学を卒業するまでの、学校に行きだしてからの期間、子どもたち自身が安心して安全に、しかも、いろんな地域の人たちと触れ合う場所が、どんどん狭まってきているなという感じがしています。

私は職業柄、発達障害の子どもたちと出会うことが多いんですが、発達障害ということがクローズアップされて、ものすごく生きづらくなり、仕事ができないとか、人間関係がすごく悪くなったとかという青年がいっぱいいたりとか、あるいは発達障害だけ先生が気がつかなくて、もっと頑張っただけ勉強しろとばかり言われて、周りからもいじめを受けて、人間不信になって引きこもりになっていらっしゃる方からの相談があったりするケースがあります。

いろんな価値観を持った人たち、さまざまな地域の人たちと子どもたちが、その中で触れ合うことで、豊かに育つということがあると思います。

それで考えたのが駄菓子屋大作戦です。子どもたちが安心して遊べて、しかもいろんな人たちがそこにいて、子どもたちのいろんな集団がそこにできるということで、切り口は駄菓子を買うということなんですけど、私たちが小さいころには、身近なところにいっぱいあって、そこに居場所があったり、そこで安心したり、いろんな知恵を授かったりみたいなことがあったので、そういう場所をつくって、そこに学社連携というか、NPOとか大学の学生さんとか、あるいは地区の民生児童委員さんとかと連携を取りながらできないかなと思いました。

空き店舗を貸していただいて、ちょっと縁台が出ていて、そこで地域のおっちゃんが将棋を指したり、いろんなことをして、子どもたちはそこで遊びも教えてもらう。子どもを中心にしながら、そこにそれこそパブみたいな、駄菓子屋みたいなものができたらいいかなと思っています。

半分思い付きに近いんですが、ずっと前からそういうのを考えていて、それなら私たちもできるというふうに思っています。

【副代表】彦根市の力石という所に行きました。力石というのは、場所を提供されてまして、喫茶店があるんですよ。「何でここに喫茶店が」と言ったら別の人がやっておりますね。そこで、県立大学と滋賀の大学の学生さんや町の商店主の中の寄り合いをやっておられるんです。普段は、いろんな町の人に来ておられる。

町のいろんな催し物のパンフレットがいっぱい置いてあるんですよ。情報センターみたいなことになっています。時々新聞に、その活動は紹介されています。

家が余っているから、何か使ってくれんかと言われ、地域の人や、県立大学の学生や先生が、来られて、たまり場みたいにされました。いろんな取組がされています。

【事務局】今、おっしゃってくださった駄菓子屋大作戦なんですけど。「だがしや楽校」という名前で、子どもたちがいろいろコミュニケーションを図りながら、好きなものを買ったりという形で取組をされている地域が全国的にあります。

インターネットで「だがしや楽校」と検索したら結構出てきて、いろんなところでそういうコミュニティづくりをやっておられます。大津市でもやっています。

【副代表】最後にコーディネートシステムと、コーディネーターの配置と養成システムの構築ということについて、ご意見をお願いいたします。

【委員】コーディネーターという役割に有給で配置するようなところは、全国ほとんど皆無に近いです。まして、美術館・博物館でも、これだけ学校連携が進み、教育普及という部分が進んでも、教育普及部門をきちっと設置しているのは、東京の世田谷美術館ぐらいでして、新しくできた国立博物館とかには一応ポジションがあっても、非常勤で、何年かしたら替わるということで、日本はまだまだその辺は一番立ち遅れてるといえるのか、そこまで人に予算が付かない段階です。

先日、琵琶湖博物館で、全国の文化施設の方と一緒に、コーディネーター研修をした時、職員の中でコーディネーターをきちっと意識を持って養成しましょうという話になりました。

ほとんど人件費はないという中で、これからどう進めていくかと考えると、まず学校側は学校の先生方のコーディネーターという意識付けをしていく中で、自らがつなぐ力を付けていくことが大事です。また、社会教育施設においても、職員さんにコーディネート力を向上させていく。

例えば、環境学習支援センターがあると、その中に実はコーディネーター的な方が配置されるんですね。元校長で理科専門の先生とか、いわゆるまさに環境においては情報を持っている人がいて、学校で何かやる時は、センターに連絡すると何かつないでくれます。

例えばまちづくりの視点だと、淡海ネットワークセンターがいろんなNPOさんの情報やシステムを持っています。文化の部分ですが文化芸術学習支援センターが県の補助金をいただいて、設立され、文化に関しての情報を持っています。

結局、縦割りを何とか一つのテーブルにつけない限り、いわゆるお互いの持っているものをつなぎ合わせる部分が無いということで、子どもを真ん中に置いて、この縦割りを崩して、そのキーワードでみんなが集まる場面をつくる、それは、生涯学習課じゃないかなということで話をしてきました。

今あるものを生かして、人材育成のコーディネート拠点をつくっていく。一緒に会う機会があまり無いので、今ある中でできることを考えていくことが、結局は滋賀県のコーディネート力を向上させるのかなと思います。誰を置くかということを考えてしまうと、まず予算の時点で難しいので、それぞれの持つコーディネート力を生かす、発展させるような、そういった場面づくりを提案できると、第一歩になるのかなという感じがします。

【副代表】ありがとうございます。確かにおっしゃるとおりです。なかなか連携というか、そういうのはできていませんね。コーディネート力というのは非常に大切になると思います。

【委員】今回、県のリーフレットの最後に、しが学校支援センターを平成20年11月に設立しましたとあるんですけど、これはどういうものなのか説明してもらえますか。

【事務局】コーディネーターを、各学校とか地域に配置すれば一番いいのですが、今は県の教育委員会生涯学習課の中に学校支援センターというのを置きまして、そこに1名常駐しています。

その仕事としては、地域の力を学校へということで、先ほどから出ていますように、支援メニューフェアとかいろいろしていますが、学校がいろいろと専門的なことを求めているという部分がありますのと、企業、NPO、団体の方も、学校へ向かって何か支援していきたいというのがあって、そこをつないでいこうとするのが、学校支援ディレクターの仕事です。

学校支援メニューフェアは、「こういったことができますよ」という、学校への紹介の場ですが、学校教育課が総合的な学習の時間の担当教員の研修をやってまして、その場に総合的な学習の時間の切り口でたぶん主任さんに見ていただければ広がるだろうということで、設定しました。

そういう活動をやっているのが学校支援センターです。

<全体会>

【代表】それぞれのグループで話し合った内容の報告をします。

まず、Aグループから報告します。

学校を一つの中心にきずなづくりについて話をしました。神奈川県でのシチズンシップ教育という話題が出されました。滋賀県でもチャレンジウィークをやって、社会体験に取り組んでいます。そのことを含めて学校を社会教育の中の一つの機能として見ていきました。コミュニティスクールという概念が欧米では定着していて、日本の縦割り教育を超えた一つのモデルとして動いていますし、イギリスでは、日本と桁違いの投資をしています。

日本では実験的に取り組まれており、滋賀県でもモデル的にやっています。

私はこれを滋賀県全体に広げたいと思いで問題提起しています。キーワードとして言えば、かつて日本の寺子屋が持っていた世界ではないか、そのあたりを現代風にどうやって構築するかが一つの突破口になるのではないかと思います。

学校と地域の連携に関わって、文化というか地域の価値観と学校の価値観を重ねていくということを見いだしていくべきだということで実践されている委員もいらっしゃいます。

トップが変わるとどうなるか、伝えていくにはどうするかという議論をしました。

社会教育施設についても同じように学校の応用で考えていくべきという話をしました。学校の概念を変えていくチャンスではないか、提言で訴えていくべきであるという意見がありました。



学校に限らず、縦割りのセクターがあることをやるときに連携・協働して一つずつ物事を解決していくことが、私の造語ですが、産公民学際連携というものです。

各分野に強力なリーダーがいるだろうし、違う文化をつなぎ合わせながら、地域の資源をうまくひきずり出しながら、プロジェクトを進めたり、きずなづくりを行うコーディネーターが大切です。

来年度まで学校支援地域本部事業もあるが、それ以降も継承発展できることを提言したり、見出すことが必要です。お金が無くても多様な在り方が求められるのではないかと思います。

これは私が思いきって言っていたのですが、きずなづくりのプロジェクトの相談に乗ったり、指導したりして育むアドバイザー、伝道師としての役割を担って滋賀県各地で、現場におけるきめ細かい指導、あるいは広げていく伝道師制度ができないか話をしました。

【副代表】 Bグループでは、4つの視点について活発な意見やご意見をいただきました。

視点2の学校を拠点とした地域連携と新たな学校運営の創造についての委員から提言いただきました。学校の基本的な形、こういうものであるべきではないかという提案でした。学校におけるコーディネーターの先生の役割が非常に大きい。実力のある、熱心な先生がいるところではまちづくりなど取組が進む。あて職という形だけのところではなかなか進まない。学校現場は非常に忙しく、先生方に力をつけていただくことも難しいけれど、管理職の先生や地域の人たちと協力して学校をまちづくりの拠点ということにしていく提言をいただきました。

次に、社会教育施設ですが、これまでのような社会教育施設ではいけない。新しい施設の形を作り出していくようにする。社会教育施設は、やや入りにくい、いつもそこにいる人ばかりが中

心になっておられて他の人が行きづらいところがないだろうか、ということから、もう少し誰でも行けるような社会教育施設ということで住民のニーズに応えられる社会教育施設、誰でも行きやすい、入りやすい社会教育施設が大切ではないか。ただし、公民館、図書館、博物館にボランティアの人がいるが、そういう人だけを優遇すると新たに入れられないこともあるという話が出ていました。新しい人が誰でもその仲間に入れるように注意すべきという話を出していただきました。

産公民学際については、県立大学が熱心に地域と連携しながら、まちづくりをやっておられるので取組紹介をしていただきました。これからも大切なことですので、このことを中心になってがんばってやっていかなければならないとご提案いただきました。

また、大津市の一里山では、乳幼児を対象とした子育て教室ということで、新しい取組としてやっておられることをご提案いただきました。誰もが気軽に子育てに参加できる場所の提供が大切であることの話をしていただきました。

社会教育はみんなと協働して、支えあってまちづくりをしていかなければいけないということについて意見交流を行いました。

【代表】事務局で記録をとっているのものでそれをもとに文章化していこうと思っています。

A、Bそれぞれのグループで共通する点や補足するとうまくはまるなという点がありました。今後、代表と副代表、事務局で作文をしますので、皆さんにご意見を出していただいて仕上げたいと思っています。

今日の私の印象ですが、7、8人ぐらいで1時間半議論するといいですね。これでお開きにさせていただきます。

【事務局】冒頭お知らせしましたように新しく亀井委員に出席いただきましたのでご紹介します。

【委員】6月に四国の松山から異動して参りました。北海道や九州などいろいろなところで仕事をしてきました、教育は門外漢ですが、放送を通じて取材などでいろいろ勉強させてもらっておりますので放送の立場でお役にたてればと思いますのでよろしく願いいたします。

【事務局】今後、本日の協議をもとに、次回の専門委員会で提言案を出して、3月に開催予定の全体会で委員皆様のご意見をいただき、提言としてまとめていく予定です。

本日は、どうもありがとうございました。これをもちまして、第3回の滋賀県社会教育委員の会議を終わらせていただきます。